

プロタゴラスとヒューマニズム

藤井義夫

(1) プロタゴラスとヒューマニズム

周知のように、シラー (Ferdinand Canning Scott Schiller 1864—1937) はイギリスにおけるプラグマティズム (Pragmatism) の先驅者として、またその代辯者として、アメリカのジェームズ (William James 1842—1910) やデューイ (John Dewey 1859—1952) などと並び稱せられる哲學者である。かれらがひとしくその思潮の源流を、プラグマティズムの命名者であり、その創設者たるパーズ (Charles Sanders Peirce 1839—1914) に負っていることも、ほとんどわれわれの常識となっている。そしてたとえそれが「古い考え方に對する新しい名」であるに過ぎないにしても、かれらが新しい哲學體系の樹立にはなく、むしろその破砕にかれらの努力を傾け、行動と效果の論理の中に眞理の場を求めようとする限りにおいて、プラグマティズムは確かに現代を象徴

する新しいひとつの哲學的な立場を代表するものと言えるであらう。

ところでシラーを他のプラグマティストたちから區別する著しい特色は、なによりもかれのプロタゴラスへのひたすらな傾倒である。ジェームズはかれの『プラグマティズム』において、「プラグマティズムの方法には目新しいものは全くない。ソクラテスはその達人であったし、アリストテレスはそれを方法的に用いた。ロッキも、バークリーも、そしてヒュームもその方法によって眞理に對して重要な寄與をした」と言っているが、シラーにとつては、學說的にも人格的にも、ソクラテスと全く對照的人物であったプロタゴラスこそ、プラグマティズムの發見者であった。というのは、かれは自分の著作のいたるところでこの偉大なソフィストに論及し、その

「人間尺度論」(Homo mensura dictum)に因んで、自己の立場をとくに「ヒューマニズム」(Humanism)と名づけ、またときには「新プロタゴラス主義」(Neo-Protagoreanism)とすら呼んでいるからである。

このことは新カント學派——とくにマールブルク學派——の人々とプラトンとの關係に近似している。たとえばコーヘンやナトルプがプラトンのイデア論の中にかれの理想主義の理念を見出したように、シラーもプロタゴラスの人間尺度論の中にかれの人間主義ないし實用主義の典型を仰ぎうると信じているようである。もしそうであるとすれば、あたかもコーヘンやナトルプのきわめて異色ある體系的なプラトン解釋と哲學史家たちによって文獻學的に實證された歴史的なプラトン解釋との比較によって、却つてそこに新カント主義の本領を知りうるように、われわれは情熱的に組み立てられたシラーのプロタゴラス像と歴史的にまた文獻學的に檢證しうるプロタゴラスのトルソーとを對照させることによって、却つてヒューマニズムないしプラグマティズムへの理解を推進しうるのではないであろうか。にも拘らず、このような視角からのプロタゴラスへの接近が、わが國において

はもちろん、イギリスやアメリカにおいてすらも、著しく閑却されていることは不思議である。本稿はこのような問題設定から出發して、それに若干の解明を與えようとする一つの試論である。

(1) W. James; Pragmatism. 1910. p. 50.

—

ジェームズやデューイなどの夥しい著作に比して、むしろ寡作家と言わるべきシラー⁽¹⁾が、直接にプロタゴラスを主題として書いた論文には次のようなものがある。

Studies in Humanism. 1907.

From Plato to Protagoras.

The Papyri of Philonous

I. Protagoras the Humanist.

II. A Dialogue concerning Gods and Priests.

Plato or Protagoras. 1908.

併し歴史的なプロタゴラスとの對質を問題としているわれわれにとつて重要なのは、これらの中、最初の『プラトンからプロタゴラスへ』と最後の『プラトンかプロタゴラスか』である。ルネッサンス以來、いな、古代末

期における新プラトン主義の興隆以來、われわれは絶えず「プラトンに還れ」という聲を耳にしてきた。しかし「プロタゴラスに還れ」という提言はおそらく前代未聞に屬するであろう。哲學史の常識を無視し、哲學思想の流れに逆行するかのような「プラトンからプロタゴラスへ」というシラーの大膽な主張は、しかし、いかなる論據の上に立ち、どれほどの歴史的な眞實性をもつのであろうか。われわれはまずかれの論旨を、できるだけ忠實に、再現してみよう。

この論文は凡そ五つの部分から成り立っている、と考へることができる。すなわち

- 一、古典教育の現代的意義について論じた緒言(第一節)。
- 二、初期ギリシャ思想の特質に觸れた序論的部分(第二―三節)。
- 三、プロタゴラスの人間主義的な主張を再認識することの必要を力説した部分(第四―六節)。
- 四、プラトンのイデア論批判を中心として、その理想主義的な教説の非現實性を攻撃した部分(第七―一七節)。
- 五、プラトンの主知主義からプロタゴラスの人間主義へ

還らねばならぬという主旨の結語(第一八章)。

この構成からも充分察知されるように、この論文はその主題にもかゝらず、プロタゴラス解釋の建設的な提示により、プラトン批判の破壊的な工作により多くの努力が傾けられている、と言わねばならない。しかしこの半世紀の間に絶え間なく續けられたプラトン研究の偉大な成果は、シラーの解釋をすでに時代遅れの救い難いものにして、と私には思われる。それ故にわれわれはかれのプロタゴラス解釋を中心に、かれの論旨を傳へうれば足りるであろう。

今日、ギリシャ哲學に關する論文を書くに當って、その緒言として、古典教育について一言しておく必要がある。「自由」教育の主要な方策として、過去に専念することを正當づける唯一のものは、過去が全くそれ自身のために、すなわち單なる歴史的精神において研究されるべきではない、ということである。歴史的精神などという觀念は何ら辯護の必要のないものであって、そのようなものは大學の術學者どもに委せておけばよい。大勢の専門家たちはそれが秘めている僅かばかりの眞理を熱心に誇

張するが、かくては凡ゆる科學、凡ゆる學問は阻害され、それらは不毛のものとなるであらう。すべて利害を没却した學問研究の高貴さについて語ることは、全くの僞善に過ぎない。事實、現代のイギリスにおける「自由教育」は傳說的な「知識のための知識の愛」に基づいているのではなくて、むしろ或る場合には俗物根性によって支えられている商業主義と競争主義 (Commercialism and Competition) という一對の柱の上に立っている。そしてこれら二つの動機がいわゆる Scholarship という妙策に結びつけられ、このお粗末な功利的制度によって徒らに文官試験の弊が助長され、試験官が知慧をしばって案出した愚にもつかぬ詮議だてやわけのわからぬ難問をありがたがる風を生じたのである。(この書物は一九〇七年の出版であるから、これらのことが今から丁度半世紀前に語られたという事實は注目に價する。) 古典教育を實際に「自由」ならしめる自然的な眞の方法は奨學資金ないし賞金制度をもってそれを支持することではなくして、言語、すなわち人間の思想や實際に缺くべからざる道具である言語を理解する手段として、またその言語を使用することによって、古代文明と近代文明との間に存

在する興味あり教訓になる關係や對比を述べけうるよう
に、精神を緊張させそして擴大させる手段として、古典
教育をできるだけ本質的に有用ならしめるにある。オク
スフォード大學の古典研究科 (Literae Humaniores) も
このような機能を果す限りにおいて存在理由をもつもの
である。

從來閑却され、また恐らくこれまで採られた立場から
は理解されなかつたギリシャ思想史上の重要な諸點を素
描するにあたって、以上の考察を私の (シラー) 辯明と
したい。その問題點というのは、プラトンが主知主義の
巨大な源泉であり、プロタゴラスに對するかれの勝利は
科學にとって大いなる障碍であつて、プラトンが概念の
機能と眞理の本質との眞の説明を與ええなかつたこと
は、凡ての哲學を腐蝕させる隠れた潰瘍であり、そして
プロタゴラスによって辯護された素直な知識の人間觀に
還ることは哲學的進歩の最も確實な保障である、といふ
ことに外ならぬ。それに續いてシラーは、神學から出發
して科學にむかつた他の諸民族の思想とは逆に、科學か
ら神學ないし神智學 (Theosophy) に進んだ「ギリシャ
天才の逆說的性格」について語っているが、われわれは

これらの論議を凡て割愛して、直ちにかれのソフィストに關する見解にむかわねばならぬ。

ソフィストたちがその主導者であった紀元前五世紀の人間主義的運動は、今日ではその眞價が納得され始めている。ゴムベルツ (Theodor Gomperz) は、かれの卓れた『ギリシャの思想家』においてグロート (George Grote) に従って、この運動が展開されるに至った原因は、當時の政治情勢にあったことを指摘している。即ち民主政治の勃興の結果、高等教育と議會辯論の力とは政治的勢力の必須の條件となり、さらに強い刺戟として作用したのは、富裕階級の生命財産の安全を守るための條件となったことである。「半ば教授で半ばジャーナリスト」であったソフィストたち、もっと現代的に表現すれば、「どの大學にも拘束されない University Extension の講師」であったかれらは、このような實社會での成功の要諦を傳授すると公言した。そしてかれらが職業的に成功を収めえたことは、かれらの教授が確實に價値をもっていたことを證明している。教育を受けることが革命的であり、教師に報酬を支拂わねばならぬことが奇怪に思われた時代、そして未だ大學に通うことが流行してい

なかつた時代、このような時代が教師という職業の黄金時代であつて、ソフィストたちが知的勞働によつて富を貯ええたことは、ほとんど信じ難いほどである。ゴムベルツは簡明に、アテナイのように訴訟を好み論争好きの場所では、ソフィストたちの仕事は「決闘が制度として確立されている社會における劍術の先生たち」に類するものであつた、と述べているが、今日では金持は法律家にならないで、かれらを雇い入れるがその頃は法律家で儲かる職業はまだ發明されていなかったのである。

かれらの活動の結果として雄辯術や辯證法が大いに發達し、ソクラテスは「反對尋問の術」(the art of cross-examination) の發明に寄與したが(かれをソフィストの反對者とみるのは全く非歴史的である)、プラトンはそれを、かれに都合のよいときには、論争術だと非難した。しかしソフィストの教育はそれを利用することができないほどの貧乏な人や、吝嗇な人たち、また極端な民主主義者や古い保守主義者たちには人氣がなかつたのは當然である。その教育は新しいものであつて、それを受けた人人に不公平な非民主的な利益を與えるように思われたからである。ソフィストたちに投ぜられた悪名の

さらなる理由は、哲學者たち（とくにプラトン）によってかれらの敵手に對してむけられた嫉妬深い駁論、ゴムベルツのいわゆる「言葉の氣まぐれ」の中に見出される。けれどもこのことはもともと論理學史上における偶然の出來事に過ぎない。最初ソフィストたちが推理について反省し始めたとき、かれらは論理學を修辭學や文法と平行させざるを得なかった。かれらは當然多くの誤謬に陥り、かれらの後繼者たちが漸次にそれを訂正していった。かくしてかれらの論理學研究のうち、價値あるものは後の論理學者たち（プラトンやとくにアリストテレス）によって採用されたが、かれらの粗漏な誤謬のみがかれらにつき纏い、その結果ソフィストは不正な推理をこととする愚物である、という誤った印象を生ずるに至つたのである。

かくして本質的にはこの大いなる知的運動が科學的興味を阻害したという非難の理由は全く存在しない。むしろもっと適切には、それは自然の學に心理的ないし道德的探究、すなわち人間の學をつけ加えることによつて、その基礎を擴大したものと言うべきであらう。そしてソフィスト中最大の人物たるプロタゴラスの偉大な觀念が

科學的に解釋されそして正當に推蔽されていさえずれば、事態はこのような行路を取つて進んだことであらう。人間は萬物の尺度である」というかれの名言は、大量の活きた意味を最も簡潔な形に壓縮したものととして、かのデルフォイの「汝自らを知れ」よりも上位におかれねばならぬ。

もちろんわれわれはこの定言の正確な内容や範圍を知らないのであつて、それを種々の仕方で解釋することができる、ということは認められなくてはならない。しかしわれわれがそれをどのように理解しようとも、それはきわめて重要で示唆的であり、たゞ一つを除いて他の凡ての仕方においては根本的な眞理である。一つの仕方とは、もちろん、プラトンのそれである。もしプラトンのプロタゴラス解釋が自己撞着に陥つていなかったとすれば、それを論難することは不可能であつたかも知れない。事實、それは現在あるがまゝで、大多數の人々に賞讃すべきものとして受け入れられ、プラトンの駁論を、相當に手加減をして考へることなしに、容認することの危険に氣のついた人々すらも、結局それに欺かれてしまつたのである。けれどもゴムベルツとともに、プロタゴ

ラスの定言の中の「人間」という言葉を素直に個人に適用することを拒否して、強いてそれを人間という種屬を表すものと解釋する必要はない。このことはプラトンがそれを無意味にしたと同様に、無氣力なものにするであろう。だからといってプラトンの遣り方が權威のあるものだとも言えない。むしろプロタゴラスの定言のすばらしい價值と示唆とは主として、このように異った解釋に導いたその簡潔さにあるものと考えられる。

かれらの大きな誤謬は相互に他の解釋を排除することを要求する点にある。しかしこうした處置については、論理的にも言語的にも何の保證もないのである。プロタゴラスは人間の知識の主觀的要素と客觀的要素とを示し、またそれらの關係の問題を示すために、わざわざこのような曖昧な形式を選んだのかも知れない。しかし元來はかれらの定言は疑いもなく主觀的要素を力説したものである。そしてそれが重要な点である。というのは各人にとってあるとみえるものは、その人にとっては眞實にあるのであって、他の人々にとっても、かれらが自分の觀念と自分とを取扱っている限り、同様のことが言える。錯覺や幻想や出來心や個人的選擇や私的判斷や凡ゆる

種類の性癖は眞實のものである。それらを難なく無視しようと想像する思想家や人間の管理者に禍あれ！のみならず個人は無限に異ったものであって、かれらを注意深く研究すればするだけ、かれらを一樣に取扱うことは眞實でなくなってくる。プロタゴラスがこのことを暗示した最初の人であったことは、かれらの偉大な功績であって、そのために科學は永久にかれに感謝の念を捧ぐべきである。

それ故にかの定言の主觀的解釋は大いなる科學的眞理を具えたものである。しかるに無批判的に反對の假定から出發して、かれら自身整合的な眞理説を展開することが全くできなかったような思想家たちによって、この定言が凡ゆる眞理を顛倒させるものと非難され無視されてしまったことは驚くべきことである。それが直接に述べなかつたもの、すなわち眞理の客觀性を否定していると想定したり、プロタゴラスがこのことに氣がつかなくなつたと假定したりすることは、確かに理由のないことである。ひとが偉大な發見をしたという事實は、必ずしもかれに凡ての常識が缺けていたということにはならぬ。或る意味で人類に共通な客觀的眞理がある、ということ

一般に周知のことである。「客觀的眞理」については、その困難さは、その事實を觀察することにはなく、その可能性の哲學的理論を工夫することにあるのであって、この點に關して哲學者たちの間にお異説がある。われわれにとつて實在がわれわれの能力と相對的なものであることも同様に明かな眞理であつて、そのことは議論の當初から前提されていなくてはならない。

それ故に人間はその種屬的な意味でも尺度であり、プロタゴラスがこのような明白な事實を見逃したとは考えられない。のみならずかれがこれを無視する理由もない。それ故にかれは通常かれに對して論ぜられるかゝる自明の理を平靜に受け入れたであらうと思われ。かれのヒューマニズムは人間と個人とをともに包括しうるほど廣く、かつ、それは後者を含むが故にまた前者をも含みえたのである。それ故にこの定言がもつ二つの意味の關係の問題が残るだけになる。換言すれば、特定の個人に對する主觀的眞理から、萬人に對する客觀的眞理への移行はいかなるものであるか。われわれは一方から他方に移り、そしてそれを首尾よく果さねばならぬことは明かであるが、どのようにしてそれをするかがかなりむづ

かしい問題となる。そして科學的な素質をもつた人には、たとえば現代の心理學的實驗に取り上げられて以來、その線にそつて、こゝに研究のすばらしい題目があつたことが明かとなつた筈である。しかしプロタゴラス自身がそのように考え、また客觀的眞理がいかにして生じたかに關して何らかの觀念をもつたと想定する理由があるであらうか。かれの寛容な人道的氣質、かれの「嚴密に經驗的な方法」、および神々については信ずるに足る知識は決してえられなかつたといふかれの嗟歎の中に現われている慎重さと率直さとは、これらの問を肯定させるに充分の資格をもつてゐる。

しかしそれよりもっと直截な證據をわれわれはプラトン自身の論駁の中から引き出すことができる。『テアイテトス』(二六六—八)の中でプロタゴラスは、たとえ或る人の知覺が他の人のそれよりもより眞であることはできないにしても、それはなおより善でありうる、と答へたと表現されている。それ故にかれの説では人間も豚も狒々も凡て一様に萬物の尺度であるなどと言つてゐるのではもちろんなく、賢者とは何かか或る人にとつて都合で悪いと思われるときに、それを自分にとつて善い

と思われるように變更し、自分を精神の悪い状態から善い状態へと轉じさせることができる人である、とプラトンの描いたプロタゴラスはきわめて明快に説明している。換言すれば、かれは個人の知覚——その凡てにいわゆる「實在」が附與せられるのであるが——の間に、價値の差別を認めているものとして表現されている。

それのみではない。プロタゴラスのためのかの不思議な演説の中には、最近數年の間にやっと注目されるようになったいくつかの他の教條が存在する。すなわち、(一) 知慧に到達することは怠惰な思辨のよくする所ではなく、自己の内外における實在の變更によつてなす遂げられる、ということが到るところではっきり暗示されている。

(二) 單に言葉の慣用からだけ議論しそして言葉の上の矛盾を、それが言葉の中に具體化された不完全な人間の知識以上のものであるかのように、無批判的に受取るところの辯證法的精神をくり返し攻撃している。

(三) プラトンの敘述では若干曖昧になつてはいるが、一、二の箇所(一六七A、一六八A)で、凡ての道徳的缺陷を知性の缺如とみなす主知主義のごまかしを拒否して

いるようにみえる。プロタゴラスは抗辯する。病人は單に「無知」であるのではない。かれは心情の變化を経験しなくてはならない。教育も單に知的な教示ではなく、新しい人間の形成であり、古い自我からの脱却である。

これらの暗示はわれわれを困惑させるほどの簡潔さではあるが、深い道徳的知見を明示するものであつて、主知主義によつて腐敗させられ、審美主義によつて無力にさせられた正統派のギリシャ倫理とは同日に談ずべからざるものがある。そしてそれらはまことに聖パウロの道徳的情熱を偲ばしむるほどである。

しかしプロタゴラスの教説は、全體としてみれば、この上もなく明白であり、合理的であり、かつ首尾一貫している。それが現代のヒューマニズムと異なるのは、單に用語の點に過ぎない。すなわち「眞」と「偽」とはその本質上「善」と「惡」と同質的な價値とは考えられていない。換言すれば、これらの言葉はもともと認識上の價値への個人の要求について用いられているのであつて、その結果に對する反省的認識に用いられているのではない。しかしそうであるにしても、このことは第二義的な差別に過ぎない。プロタゴラスはすでに「眞理の多

「義性」を意識し、たゞそれがプラトンの敘述の中でほかされたのかも知れない。實在を變更し、この過程を眞理の形成に關聯させることの必要、そして惡を無知に歸することの不可能に關してプロタゴラス主義と新プロタゴラス主義とは一致しているようである。

それ故に残された唯一の問題は、これら凡ての教説がどの程度までプラトンのプロタゴラスから歴史的プロタゴラスへ移行させるかである。プラトンのソクラテスの場合も同様であるが、この點について完全な説得力は議論によつては得られない。歴史的ソクラテスは何も書かなかつた。歴史的プロタゴラスの名著『眞理論』は破棄されてしまった。アテナイ人はかれの著書を、不敬神の故をもつて、焚書の刑に處したからである。その厄を免れた若干のものも、恐らくプラトンの主知主義が久しく君臨していた間に、無視されて湮滅してしまつたのであるう。かくて民間信仰と獨斷的哲學とからきた偏執によつてギリシヤ天才の記念すべき最大の著作の一つが失われたのである。

けれども『テアイテトス』における「プロタゴラスの辯護」は、疑いもなく非常に縮少されそして多少再現に

缺陷があるにしても、現在のままで、かれの眞の教説を具體化していることはその内面的な證據からみて、ほとんど疑いの餘地がない。⁽³⁾しかしプラトンが眞理の本質は本質的に實在の變更に依存するといふプロタゴラスの教説を理解しえたと思われる場所はどこにもない。かれがそれを検討したならば、かれは『テアイテトス』の否定的な結果を免れただけでなく、かれの知識論を全面的に變更せざるをえなかつたであらう。またかれは無知としての惡徳の主知主義的分析が根本的に犯している誤謬にも氣がつかかなかつた。最後までかれは概念を弄ぶ辯證法が宇宙の秘密を闡明する方法であると信じて疑わなかつたのである。そして最も意味深いのは、プロタゴラスが認めた知覺における價値の區別が、全く虛妄であり不可解だとして取扱われていることである。プラトンはそれがかれのソクラテスの取るに足らぬ反駁や淺薄な愚弄への完璧な答辯であることを理解しえず、それに答えなかつただけでなく、最も作爲的なすばらしい餘談に訴えることによつて、プロタゴラスの辯疏から注意をそらせざるをえないと感じたのである。

かくてもし眞理が評價であり、そして善が惡から區別

される如く、眞が偽から區別されるというこの教説が、眞にプロタゴラスに歸しうるならば、かれは最も妥當的なまた科學的な仕方です。客觀的判斷から客觀的判斷に轉ずる方法を知っていたということ容易に知ることができ、なぜならこゝに價値の異つた多くの主觀的な判斷があるとするれば、最も價値があり最も有用なものの選擇ということが起つてくる筈であり、その結果、實際は凡ての人によつて共有されそして承認される客觀的眞理がそこから構成されてくるであらうからである。感覺的知覺についての一般の一致も實際にはこのような過程によつて成立したものであることも確かである。また社會が道徳的なあるいは審美的なことがらについて異つた判斷を下している人々を強制したりあるいは勧誘したりして、客觀的な秩序を樹立するに至つたとも言えるであらう。そしてこの點をプロタゴラス自身は、自然淘汰の發見がわれわれに可能ならしめていられるように、明瞭ならしめることはできなかったことは疑いの餘地がないにしても、すくなくとも、かれはかの定言の二つの意味の間の現實的な關係の端緒を知っていたということとは確かである。

以上がシラーのきわめて大膽なそして特異なプロタゴラス論である。しかしこゝには吟味さるべき多くのものが残されている。

一、プロタゴラス學説を知るために、われわれにどのような資料が遺されているか。

二、それらの中でシラーが最も重要な、ほとんど唯一の典據として取り扱い、かれの『プラトンかプロタゴラスか』という論文において、さらに詳細に舉證し論述を重ねているプラトンの『テアイテトス』における「プロタゴラスの辯護」は、シラーの解釋を許すであらうか。

三、歴史的プロタゴラスは果してシラーの意味におけるヒューマニストないしプログラマティストでありうるであらうか。

(未完)

(1) 私の知る限りでは、シラーの著作には次のようなものがある。

Riddles of the Sphinx. 1891.

Axioms as Postulates. (in Personal Idealism ed. by

Henry Sturt). 1902.

Humanism. 1903.

Studies in Humanism. 1907.

Plato or Protagoras. 1908.
Error. 1911.
Formal Logic. 1912.
Problems of Belief. 1924.
Our Human Truth. (ed. by Louise S. Schiller). 1939.
(2) これらについては多くの異論があると思われるが、今は

觸れなす。Schiller: Studies in Humanism. p. 32. note.
1. を参照せよ。
(3) この問題は Plato or Protagoras に詳細に論じられて
いる。

(一橋大學教授)